

彦六ダブ

ひころく



登場人物

ナレーター

彦六

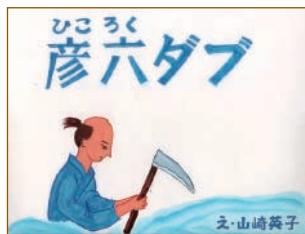
娘

母親

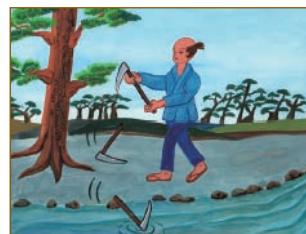
弟

お坊さん

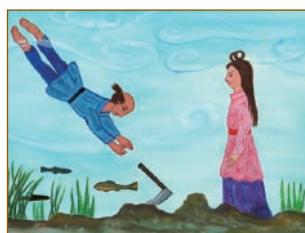
村人



1



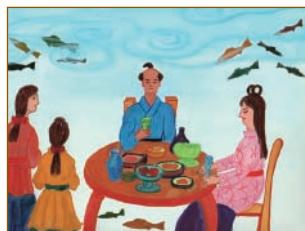
2



3



4



5



6



7



8



彦六

昔、下今泉の鶴松に彦六という働き者で親孝行の若者が住んでいました。年の暮れのある日、彦六は正月用の門松を切りに、鳩川沿いの松林へでかけました。

その日は、買ったばかりの新しいナタを持って行き、手ごろで形のいい松を探して歩きました。ふと、ふりかえると、さつき見たはずのあたりにすばらしく形のいい松が立っているではありませんか。

「おかしいな、さつき見たのに・・・」

と思いながらもその松を切ろうとナタをふるいました。ところが、カチーンと金物をたたくような音がして、ナタははねかえされ、川の中へ飛んでいつてしましました。

「あーせつからく買ったばかりなのに」

川に落ちたナタが惜しくて、彦六は冷たい水の中に飛びこみました。いちばん深いところまでもぐつて探していると、川の底にとてもきれいな女人が立つてているではありませんか。

暗い水の底がそこだけ明るくなつて、もえぎ色の絹の着物を着て、髪には、七色に光るかんざしをつけていました。その女の人は彦六の顔を見てにつこ



り笑わらい、

「どうしてここへいらつしやつたの？」

とたずねました。

彦六 「ナタが川へ落ちてしまつたのです」

娘 「ああ、それならうちの女じょ中ちゆうが拾ひろつてきました。うちへいらつしやい」

と彦六を自分の家へ案内あんないしました。

「水の中なのに地上ちじょうにいるのと同じように歩けるし、話すこともできる」

彦六は夢ゆめを見ているような気持ちで、水の中を歩いて行きました。

娘の家へ着くとびっくり。今まで見たこともないような立派りつぱな御殿ごてんです。

娘が手をたたくと色々なごちそうを運はこんできました。特にめずらしかったのは、「不老長寿ふろうちようじゅの酒さけ」でした。

あまりにも居心地いごこちがいいので、彦六は三日三晩みつかみばんそこでお世話せわになつてしまいましたが、

彦六 「家では心配しんぱいしているだろうな。今までだまつて家を空けたことはないからな・・・」



娘

彦六 娘

と、そろそろ家のことが心配になりました。

娘はすぐ彦六の気持ちをさつして

「あなたはお家が恋しくなつたのでしょう。無理におひきとめはしません。

記念に私が大切にしている手文箱をあなたにさしあげます。この箱には“す
ずめの空音”という宝の玉が入っています。私に会いたくなつたら、この玉
を振つてください。また、この玉を通してすずめと話すこともできます」

と、きれいな箱を彦六にわたしました。

「ごちそうになつたうえ、おみやげまでいただきありがとうございます」

「ひとつだけ約束してください。宝の玉は、誰だれにも見せないでください」

「わかりました。約束は守ります」

あれから、地上ではすでに三年の歳月がたつていました。彦六の家では、
門松を切りに行つたきりなかなか帰つてこないので、ダブへ落ちてしまつた
ものと思い、悲しみに沈んでいました。今日は、お坊さんに押おがんでもらつて
いました。彦六が家中へ入つて行くと、



弟 彦 六
母 親

彦 六 坊さん
母 親

彦 六

「だれの葬式そうしきだ」

「わあー ゆ、ゆうれいだー」

「ほんとに彦六か？今までどこへ行つてたんだ」

「あんちゃんがいなくなつてから、ず一つと搜さがして いたんだよ」
「でも、無事ぶじに帰つて来てくれて、本当に良かつた」

「みんな、心配しんぱいかけたなー」

「あーびつくりした、人騒ひとさわがせな男だ。しかし、こんなめでたい事はない」
「あんちゃん、三年もどこへ行つてたんだ」

彦六は、三日しかたつてないと思つていたのに三年も過ぎすていたのにおどろきました。そして、彦六の話を聞いているうちに、おみやげにもらつてきた手文箱なかみの中身なかを知りたくなりました。

「あんちゃん、中なかを開けてみせてくれよ」

「娘さんと約束したから、誰だれにも見せられねえ」

「きれいな箱だね。何が入つてあるのか見たいね」

「あんちゃん、いいだろう、一回ぐらい見せてくれ」

しかし、家のものがあまりにもしつこく言うので、とうとう箱を開けてしまいました。すると空は急に黒い雲におおわれ、ものすごく大きな雷が鳴り出し、彦六も箱もいつぺんに消えてなくなりました。

その夜、みんなは同じ夢をみました。それは天女のようないい女のひとに彦六が手を引かれて、空高く雲のかなたへ飛び去つて行く夢でした。